

三陸海岸の津波災害についてのその後の考察

本サイト“東日本大震災関連のトピックス”では、以前に東京新聞の『防災の日を考える「生き抜く力」学びたい』と題する社説（2022年9月1日 配信）を取り上げ、その中で紹介されていた山口彌一郎著『津波と村』にも触れさせて頂いた。最近、気になって、この『津波と村』で取り上げられていた釜石市の唐丹本郷と両石町について改めてネット検索してみると以下のことが判ってきたので、前報の追加資料としてここにまとめておきたい。



釜石市唐丹本郷周辺の地形図(国土地理院 1/25,000 地形図より)



縮尺を変えた釜石市唐丹地域の地形図。前回は専ら小白浜地区に注目し本郷地区を見逃していた。(国土地理院 1/25,000 地形図より)

唐丹町本郷 津波記念碑が震災遺構に～国立民俗学博物館主導で補修

復興釜石新聞アーカイブ 2021.4.12. 配信

東日本大震災で損傷した釜石市唐丹町本郷地区の明治三陸大津波記念碑「海嘯遭難記念之碑」の保存事業は、16日に完了した。大津波の波力や漂流物の衝突で欠損、失われた碑文の一部をそのまま

に、残った板面を補強、接着し直す作業により、市内では珍しい石碑の「東日本大震災遺構」となり、後世に大災害を伝承する。この津波記念碑は1896(明治29)年6月15日に発生した三陸大津波の被災から33回忌に当たる1928(昭和3)年、地元住民の発案で建立された。一部はコンクリート基礎に埋め込まれた石碑の地上高は270cm、幅160cm、厚さ155cmのくさび形の自然石。上部に標板(横70cm、縦35cm)、碑文は縦1m、横75cm。全文263文字の碑文は、大津波の発生(旧暦5月5日の端午の節句)、流失家屋300戸、犠牲者800人で、生存者20人の壊滅的な被害のほか、未来に伝え続けるよう強い思いを刻んだ。本来の建立地は南に約110mの地点だが、2008年に道路改良工事に伴い現在地に移転。1933(昭和8)年の三陸大津波、10年前の震災を伝える「伝えつなぐ大津波」と並ぶ。浮き彫りの銘板、刻字した碑文の基盤はアスファルト状の素材



津波記念碑を大震災遺構とする修復作業

という珍しい形式だ。震災の津波で、碑文が欠損。残存部分は接着面の劣化で浮き上がり、多数の亀裂もあった。保存事業は、それらを修復し、半永久的に残す目的で行われた。全面的な「復元」ではなく、損傷したまま残す「震災遺構」とした。事業主体は「伝承碑修復事業実行委員会」で、本郷町内会の小池直太郎会長を会長に、市、唐丹地域会議(佐々木啓二議長)、釜石観光物産協会などで構成。公益財団法人東日本鉄道文化財団も参加し、事業費約100万円の半額を助成した。修復は国立民族学博物館(大阪府吹田市)の日高真吾教授(文化財保存科学専攻)が主導し、京都府の専門業者文化創造巧芸(和高智美代表)が参加。剥離、回収した断片を持ち帰り塩抜き。パーツを炭素繊維で固定し、本郷に持ち込んだ。16日まで3日間かけて元の位置に接着、前面の亀裂にパテを埋めて完了した。日高教授(49)は「記念碑には建立当時の人々の『伝え、残したい』という強い思いが込められており、感動した。三十三回忌まで建立の時間がかかったことに復興の苦難を感じる」と語った。小池会長(74)は「記念碑が震災の遺構となることは大事だ」と意義を強調した。同博物館では「復興を支える地域文化～3.11から10年」展を今月4日から5月18日まで開催中で、同記念碑の原寸大レプリカと、同博物館が復興を支援した釜石市の南部藩寿松院年行司支配太神楽、大槌町の大槌虎舞など6団体の衣装が展示されている。[復興釜石新聞(合同会社 釜石新聞社)問い合わせ:0193-55-4713 〒026-0044 岩手県釜石市住吉町3-3]

釜石市産業振興部商工観光課

唐丹町本郷の桜並木

昭和8年の三陸大津波により大被害を受けた旧唐丹村の復興への願いと、同年の現天皇陛下のご生誕の祝福を兼ねて、昭和9年春、唐丹地区に2800本の桜が植えられました。一番の見所が本郷の桜並木で、3年に一度の天照御祖神社祭典では、桜の下を大名行列が練り歩きます。

基本情報

連絡先名 釜石市産業振興部商工観光課

所在地 〒026-0121 岩手県釜石市唐丹町本郷

電話番号 0193-22-2111 FAX 番号 0193-22-2686

ホームページ <https://www.city.kamaishi.iwate.jp/docs/2014070300036/launch>



釜石市両石町の津波災害と津波記念碑

岩手日報 2019年01月23日 配信

釜石市街地の北部に位置する同市両石町の国道45号沿いに津波記念碑が3基並ぶ。その一つが「両石海嘯(かいしょう)記念碑」。漢文で「此碑可滅矣此恨不可滅也」と刻み、「碑は滅するが、恨みは消えない」と訴える。そして「子孫伝之」と続き、津波を言い伝えとして子孫に伝えるよう訴えている。

同町は1896(明治29)年の大津波で甚大な被害を受けた。三陸のリアス海岸の形状により高さ14.6mの津波が集落を襲い、釜石市誌によると住民958人のうち824人が犠牲に。住家141戸が被災し、残ったのは3戸だけだった。明治の大津波後、両石では高台への宅地造成は行われず、元の場所に住宅を再建。その際に▽率先避難▽共倒れ回避▽家系存続—を遺戒とした「命てんでんこ」の教訓が言い伝えられるようになったという。生き残った人々が語り継いだ教訓は、37年後の1933(昭和8)年の大津波で生かされる。再び集落を襲った大津波で約9割の住家が被害を受けたが、両石町の死者・行方不明者は3人だった。1902(明治35)年に建立した両石海嘯記念碑などは、東日本大震災の津波を乗り越えて今も教訓を発し続けている。

「意識する力」を共有

2011年3月11日。津波は釜石市両石町の防潮堤を越え、一気に集落をのみ込んだ。市の資料などによると同町(水海地区含む)の犠牲者は46人(関連死含む)で、約290世帯のうち約240世帯が全壊。町の姿は一変した。「盛り上がり黒い巨大津波が押し寄せてくる。本当に恐ろしい光景だった」。長年郷土史を研究し、語り部として教訓を発信し続ける瀬戸元さん(73)はこう振り返る。

町内会で防災活動に取り組んできた同町は、体制整備のため2010年12月に自主防災組織を設置。「住民の命を守る」ことを掲げ、避難時に支援が必要な高齢者や歩行困難者などを把握し、避難ルールの周知も進めていた。だが、避難行動の遅れなどで尊い命は失われた。先人の教訓を生かし切れなかった。東日本大震災から7年以上がたった2018年7月、海を見下ろす高台の市有地に震災の慰霊碑が建った。町民や地元出身者、法人・団体からの寄付を充てた碑にはこう記されている。「教訓はひとつ。徒に津波の規模を想定せず、津波警報が出たら自らの命を守るべく、高台目指しとにかく避難すること」慰霊碑建立を提案した沢口勇助さん(80)は「明治の津波を生き抜いた祖母から『地震が来たら津波が来る。逃げろ』と言われ続けていた。私たちは震災を忘れてはいけない。一人一人が記憶の中にとどめ、慰霊碑に手を合わせてほしい」と思いを語る。復興事業で20mにも及ぶ大規模な盛り土工事が行われた両石町は、災害公営住宅や自力再建の住宅が並び、やっと町の姿が見え始めている。「震災前は先人が残した碑に対する畏敬の念がなかった」。瀬戸さんはこう語り、「石碑という情報板が私たちに教えてくれている。防災力とは『意識力』だ。



日々変化する町並みを見つめ「一人一人の『意識力』が何より大事だ」と語る瀬戸元さん



大規模な盛り土工事が行われ、中央奥に災害公営住宅や住宅が立ち並ぶ釜石市両石町(岩手日報社小型無人機から撮影)



【2011年3月11日】防潮堤を越えた津波にのみ込まれた両石町(瀬戸元さん提供)

【2011年3月11日】防潮堤を越えた津波にのみ込まれた両石町(瀬戸元さん提供)

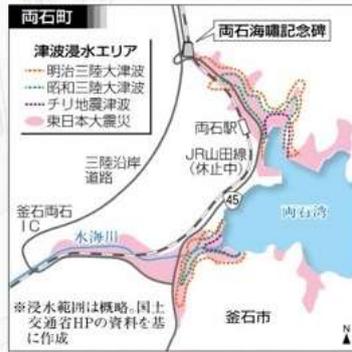
碑の記憶

いしぶみ

岩手日報社 × IBC 岩手放送

津波への恨み遺戒に

釜石市・両石町



両石海嘯記念碑
この碑はいつか無くなるが、この恨みを無くしてはならない。たとえ雨に洗われ、苔に触され、碑字が摩滅しようとも、明治29年6月15日の津浪被災を昔からの言い伝えとして子孫に伝えよ。
(中略)

その荒れ狂う大波の中において無事生き残った者はわずか204人のみ。なんてそれはむごいことであらうか。
(中略)

この碑は無くしてはならない。
(二部省略・現代語訳)



動画：【碑の記憶】両石海嘯記念碑(釜石市両石町)の一部

釜石市両石町の津波災害と津波記念碑に関する資料は以下のサイトに基いている。

<https://www.iwate-np.co.jp/content/ishibumi/20190123/>

山口彌一郎著『津浪と村』(復刻版)を発見

2023.2.2. 横浜伊勢佐木町のブックオフにて

本日、横浜みなとみらい地区で開催された『第 27 回 震災対策技術展』の帰路、赤レンガ倉庫、日本大通り、馬車道を通って伊勢佐木町までを散策してきた。最後の目的地は伊勢佐木町商店街の有隣堂とブックオフに立ち寄って、近くの書店では入手できなかった『津浪と村』を探してみることにあったが、幸いなことに最後の最後に入手することができた。早速、2022年9月1日の東京新聞社説に引用されていた、共通テストに出題された津波被災地が何処であったのか、同書を調べてみた。結果はあっけなく判明した。

『津浪と村』で紹介されていたのは、明治と昭和の三陸津波で被災した唐桑町(当時は唐桑村)只越地区の集落の変遷を示す「唐桑村只越の聚落の移動図」であった。右に示すのは同じ地域の現在の国土地理院地形図である。これで昨年9月来の疑問点は解消された。機会があれば現地を訪ねて集落の変遷を確認してみたい。



唐桑村只越の聚落の移動図